
刀鍛冶の話

ととととん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刀鍛冶の話

【Nコード】

N5307P

【作者名】

ととととん

【あらすじ】

神様の手伝いをする事になった主人公。

テンプレな展開で能力をもらって…。

神様のイタズラ（前書き）

はじめましてととととんとんです。

小説とか初めて書くので暖かい目をお願いします。

神様のイタズラ

右も左も何も無い場所。

そこに一人のオッサンが少年を木の棒でつついていた。

（主人公Side）

俺の名前は　　だ。

昨日は部活で疲れたから気持ちよくなてたんだが…

つんつん

「……………」

つんつん

「……………」

つんつん

ガバツ！！

「もう、うざい！！今起きるから！！」

見つめ合う俺と変なオヤジ。

ちょっと確認してみよう。

昨日は部活から帰って来てちゃんと家にかえったよな。

まわりを見る限り家ではないと。

「…変態に誘拐された!？」

「さてさて、何でそうなる!？」

「いやだつて明らか仕事してなさそうな汚いオッサンが起きたら目の前にいたんすよ!？」

「き、汚いオッサン…!？」

薄汚いローブみたいなものを着たオッサンは何故か泣きながらうつぶむいてしまった。

どうでもいいから早く復活して説明してほしい。

「それで何で俺なんか誘拐したんすか?? 親金持ちってわけでもないですよ??」

「そうじゃつた、まだ説明をしとらんかったな。私はお主の世界の神じゃ。」

うわあ、妄想癖のあるオッサンかよ。痛すぎるだろ

「ワシの扱い酷くない!？」

「あれ、俺口に出してないのに」

「当然じゃ、心くらい読めるわ。神じゃもん。」

この年のオッサンが「もん」とか言いながら胸張るとか吐き気するぞ。

「…ねえ、ワシ泣いていい??」

「あつ心読めるのか、すまんオッサン。それであんたがホント神だとして何の用??」

「お主こんなこと言われて信じるのか??」

「いや、まわりにあんたしかいないからしゃーないし」
「まあ、いいか。それでお主にちよつと手伝って欲しい事があるんじゃない。」

神って言ったくせに出来ない事あるとか論外だろ。

「…おまわざとワシをいじめとるじゃろ!」

「いや、本音だ。」

「余計酷いわ!」

「まあいい、何を手伝えれば良くて何で俺なんだ?」

「いやの、ワシが趣味で作った世界があるんじゃないが下界のマンガを参考にしたんじゃないよ。そしたら原作通りに進むって事に気付いてそれならマンガ読めばいいじゃんってなったわけよ。」

…やっぱりバカだこのオヤジ。

「そこでお主にはその世界で生活してもらいたい。ちなみにお主にしたのはたまたまじゃ。」

「お前のわがままじゃねえか!しかもたまたま63億人から選ばれるとか運良いのか悪いのかわかんねえよ!」

この流れは二次創作によくある転生して世界を救えってか??

「まあ、いいじゃん。どうせ手伝わんとここから出さんしもとの世界にも帰れんぞ?」

「……はあ、分かったよ。でもちゃんと帰れるんだな?」

「それは大丈夫じゃ。お主の世界の時をお主が帰ってくるまで止めておくからの。」

「普通に時間止めるとかスゲーな。で、マンガって何のマンガ参考にしたんだ?」

おっ、転生じゃなくてトリップか!!
しかも時間止めてくれるなんてラッキー。

「NARUTOじゃ」

「……Pardon??」

こいつ今何て言った??

「だからNARUTOじゃ。耳悪いのか??」

「死亡フラグ満載じゃないか!!俺に死ねと??」

「別に忍にならんでも生活してくれたらそれだけで何かしらの変化は起こるからそれでよい。それでも心配ならなにか能力でもいるか??」

能力か、とりあえずは

「じゃあ無敵で。」

「却下。」

「じゃあ攻撃絶対食らわなくしてくれ。」

「却下、ずるしすぎじゃい。」

やっぱりダメか。

「じゃあどんなのならいいんだよ!??」

「NARUTOの世界で最強レベルならまだしもそんなのおもしろくないじゃん」

こいつ、殺したい。

「わかったよ、じゃあNARUTOの世界での身体能力、チャクラを最強レベルで!!」

これくらいないと現代人の俺はすぐに殺される!!

「まあ、ええじゃろ。でも鍛えたら最強レベルになれるような体にするだけじゃぞ??」

「まあ、頑張るわ。」

「まだ何かいるか??」

「そうだな…武器がほしいけど」

エクスカリバーでもくれねえかな。

「じゃあ斬魄刀でもいるか??」

「マジか!!…なあオツサン、斬魄刀って自分で作ったり出来ないのか??」

斬魄刀でも充分だ!!それに自分で作って売れば金になるぞ。

「出来んことはないが…まあいいか。そのかわり作ったお主が使うのは何本使ってもいいが他の人は一人一本しか使えんぞ。」

「サンキューオツサン!!」

「じゃあそろそろ送るぞ??」

「ああ、行ってくるよ!!」

まあ、修学旅行だと思って楽しみますか。

「あつ、ちなみに不老化して原作の100年前に送るから。」

「ちよつとまで!!」

直後 は光に包まれ消えていった。

「あのクソジジイ今度会ったらぶん殴る!」

初日

とある森の中の小屋で一人の寝息をたてていた。

つんつん

「……………」

つんつん

「……………」

つんつん

ガバツ

「またこのパターンかよ!!」

目の前には大きな狼がいた。

あつれ〜、早速死亡フラグ来ちゃった??

しかし狼をよく見てみると口に巻物をくわえている。

「巻物くれるのか??」

「わんツ!」

すぐに巻物を開くと神様からのメッセージがあった。

”目が覚めたかの??今お主がおる場所は将来木の葉隠れの里が出来る場所じゃ。その小屋はワシからのプレゼントじゃ。”

へえ、あのオヤジ結構サービスいいな。

”ちなみにお主の能力じゃがオリジナル斬魄刀作るのとか大変そうだから刀にいろんな能力つけれるようにしといたぞ。”

ありがたい、正直俺の想像力じゃしんどいよな。

”ぶつちやけ斬魄刀作る能力授けるのが意外と難しくてめんどくさいだけじゃが”

…ブチツ

”まあどうせお主にはオリジナルとか作れなさそうだからこつちの方がええじゃろ（笑）”

バカにされたけどほんとの事だから言い返せない！！

”小屋の奥の扉から作業場の洞窟に入れるぞ。そこに刀の柄が刺さってるから能力想像しながら抜けば斬魄刀もどきの出来上がりじゃ。バカなお主でもできるようにしといた。”

いちいちイラつく事言うな。

”斬魄刀もどきは1日1本しか作れず1日経ったら同じところに刀の柄がまた生えてくるぞ。ちなみにお主以外だとその人の魂に反応して斬魄刀もどきが作られる。本人以外だとただの刀になるから気を付けよ。”

意外とめんどくさいな。ポンポン作れたらよかったのに。

”お主ね名前じゃがワシが特別に新しく着けてやる。雲崗、珍宝、萬歩卯、蒼刃から選ぶがよい（笑）”

選ぶがよいつて蒼刃以外選べねえよ！！

” そうか、蒼刃か。おもしろくないのう。”

分かってたなら聞くなよ。

” ちなみにその小屋普通の忍具や武器を作る工房や店として活用出来るようにもしてあり、刀鍛冶の知識も頭に入れといたぞ。”

使えるのか使えないのか分からんジジイだな…。

” ちなみに巻物を持たせた狼はワシのペットの一匹じゃ。お主が名前をつけてやってくれ。それじゃあ元気でな。ファンキーな神様より”

… やっぱ頭痛いやつだったか。

” 追伸、不老のついでに肉体年齢変えられるようにしといたから怪しまれないように仙人の振りでもしておくがよい。”

確かに歳とらなかつたら大蛇丸に狙われそうだな。

くい

狼が蒼刃の服を引っ張って何かを訴えている。

「おいおい、服を噛むなよ。あつ、名前つけて欲しいのか!!」

「わんツ!!」

「そうだな、神様のペットで狼だろ…。フェンリルでいつか、神話に出てるし。」

「わんツ!!」

「じゃあフェンリル、洞窟に行ってみるか。」

「わんツ!!」

小屋の奥の扉を開けると冷たい空気が流れ込んでくる。

奥に進むと核シェルター並のどでかい扉が現れた。

「でかいな。でもどうやって開けるんだ??」

するとフェンリルが蒼刃を引っ張って扉の近くに連れていった。

そこには暗証番号を入力するっぽい機械と指紋を判別するっぽい機

械があつた。

「暗証番号か…。フエンリル知ってるか??」

「わんツ、わんツ、わんツ、わんツ!!」

「さすがに狼の言葉はわかんねえよな。」

「わんツ、わんツ、わんツ、わんツ!!」

「…もしかして1111か??」

「わんツ!!」

とりあえず暗証番号は早めにかえよう。

指紋判別装置の方は何事もなく終わり巨大な扉が開く。

中はそんなに広くなく、壁に刀の柄が刺さっていた。

すぐさま蒼刃は抜いてみることにした。

能力はどうしようかな…。記念すべき1本目だし生涯の相棒にした
いよな。とりあえずあれやってみるか。

イメージだ、あのイメージを強く!!

蒼刃は刀の柄を思いつきり引っ張った。

現れたのは見事な日本刀。その瞬間蒼刃の頭の中に刀の情報が流れ込んできた。

「なるほど、始解だと属性やら能力がついて卍解だと属性強化が能力強化が能力プラスになるのか。」

「よろしく頼むわが主。」

「誰だ!!」

「我が名は合閃。そなたと共にあるものだ。」

蒼刃が後ろを向くと真つ黒なロングコートにフードをかぶった男がいた。

「もしかして斬魄刀??」

「そうだ。」

「斬魄刀との会話ってこんなに早く出来るっけ??」

「そなたには充分な力がある。始解も卍解もできるぞ。」

「マジで!?!あのオヤジがやってくれたかな??早速試してみるか。」

蒼刃は小屋の外に出るとそこは森の中に少し広場があるような場所だった。

「とりあえず始解からいってみるか。」

.....。

「……どうやるんだ??」

「我が名を呼べ。さすれば出来よう。」

「うわッ!!びっくりした。急に後ろから話しかけるなよ!!」

「……。」

「よし、やるか。フェンリルちょっと下がってるよ??」

「わんッ!!」

「弾ける、合閃!!」

蒼刃の両手に刀身の紅い刀と蒼い刀が包まれていた。

「まあ、あれをやろうと思ったなら二刀流になるか。」

蒼刃は合閃をふってみると右の紅い刀から炎が、左の蒼い刀から氷が出た。

「よしよし、予想通りだな。技いっとくか!!」

蒼刃は右の紅い刀を構えて一気にふりおろす!!

「カイザーフェニックス!!!!!!」

紅い刀から炎の鳥が現れ正面にあった木に衝突し、木は一瞬で炎に包まれた。

「なかなかだな!!それにしてもなんか一気に疲れたぞ。もしかしてチャクラ使ってるのか…。」

自分の手を見つめそつとつぶやく蒼刃。

「この分だと卍解も1日に3回くらいしか使えないな。ま、やってみるか。」

「ふう、卍解!!!」

蒼刃は目を瞑り集中して一気にチャクラを開放した。

すると左の蒼い刀が伸び右の紅い刀が縮み蒼刃は弓を構えるポーズをとる。

「メドローア!!!!!!」

蒼刃の手から光の弓矢が飛び出し前方の物体を消滅させてゆく。

「はあ、はあ、しんどいけど威力ヤバいな！！それに夢も叶ったし！！！」

見ると遠くの山の麓まで綺麗に削り取られていた。

「今日はこのくらいでいいか。フェンリル、肉を取ってきてくれないか？？」

「わんツ！！！」

フェンリルは山の中に走りだし30分で鹿を捕らえてきたが、蒼刃は鹿などさばいたことなく丸焼きにしてまずい肉をたべるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5307p/>

刀鍛冶の話

2010年12月25日21時22分発行